

# 創造的曖昧

町田宗鳳 (プリンストン大学)

MACHIDA Soho

昨今のアメリカにおける日本研究者の間では、どの分野においても反日本人論的傾向が相当広く行き渡り、日本人や日本文化に少しでもオリジナルなものがあるという見方をほのめかす内外の学者がいると、国家主義的だとか、学問的正確さを欠いているという非難が容赦なく浴びせられる傾向がある。筆者の本論文もその類の内容であると早合点され、不本意な批判を受ける可能性があるが、日本文化が他国と比べて特別にユニークであるとか、ましてや日本人が他民族よりも優れているというような立場からの見解ではないことをはじめに言明しておきたい。根拠もなく日本を特別視するような学説は大いに排除されるべきだが、どの国にもそれなりの歴史的地理的条件の中で培われてきた特徴となる体質があるはずであり、それを全面否定しようとする学問的風潮には反省が加えられるべきだろう。

さて、日本人はとかくイエスとノーのはっきりしない言動をとり、論理的整合性のある明確な思考を苦手とすると言われてきた。内外に大きな不幸を引き起こした先の世界大戦も、発端は一部軍人の暴走によるものとはいえ、究極的には個人の意思をできるだけ抑圧し、特に公の場では自己の立場を明確にしないという全体主義に走りやすい国民性に問題があることは明白である。このような無自覚で曖昧な思考形態には、政治的な危険性をも含めてさまざま問題点が多いことは、いくら強調しても強調しすぎることはない。<sup>1)</sup>しかし、本稿で取り上げたいのは日本文化が包含する曖昧性には、否定的側面だけでなく、逆に積極的に評価すべき点もあるということである。

## 聖と俗

まず、日本の宗教では聖と俗の境界線が曖昧であり、決してそこには裁く神と裁かれる人間という断絶はなく、神と人、聖と俗が本質的に繋がっている。聖なるものも顕現の仕方が八百万（やおよず）の神という言葉に象徴されるように典型的な多神教の形態をとっているが、実際にはすべての神や仏が互いに連続しており、究極的には信仰の対象として一神教的統一を保っている。例えば、筆者が研究対象としている熊野信仰の場合も、土着のアニミズムと神道と仏教の三者が混然一体としており、神仏習合という単なる宗教学的な概念では捉えきれないほど複合的な形態を呈しているわけだが、かつては「蟻の熊野詣」と言われるほどの熱心な信仰を維持してきた日本人の眼には、このような宗教現象も何ら矛盾として映ることがなかった。

日本の歴史を通じて、宗教間の対立がごく稀で、人々も世俗生活と宗教的価値の矛盾に余り悩むことがなかったのも、日本宗教の曖昧的性格によると思われる。救われるためには、家を捨て戒律を厳しく守りながら専門的な修行に生涯を捧げる必要があるというような考え方は、この国では余り受け入れられることがなかった。13世紀にいたって法然たちの手によって始められた新

しい宗教運動、つまり鎌倉新仏教の評価の仕方はいろいろとあるが、その大きな特徴の一つは、聖と俗、仏と人との境界線が実に曖昧にされてしまい、宗教的絶対平等主義を曲がりなりにも実現させたことにある。その人の世俗的社会における地位や日常の生活態度を一切問題とすることなく、念仏や題目を称えたり、坐禅をしたりするだけで、無条件に仏の世界に移行できるという考え方がこれほど徹底して普及した仏教国は他にはない。9世紀末の遣唐使廃止から法然などの全く新しい価値観を持った宗教家が出現する12世紀末までの300年間という時間は、大陸からの仏教思想が太古から日本人の宗教的情緒の底流に流れていた楽天的な常世（とこよ）観と混ぜ合わされ十分に発酵するのに、どうしても必要な時間だったのだろう。<sup>2)</sup>

そして、いまだにこの国では職人氣質と言われるような伝統的考え方が尊重されているのは、日本人が世俗的職業の中にこそ宗教的な価値を見いだしてきたからであり、日本人にとって現実からかけ離れた超越性というのは、容易には把握しがたい代物である。マックス・ウエーバーも指摘しているように、プロテスタントにも世俗的職業を神からの使命と受けとめる考え方があるわけだが、日本人の場合、教会（寺院）にも行かず洗礼も受けずに、日常の営みを宗教的営みと完全に重ね合わせるという徹底したものである。

江戸期を通じて隠れキリシタンが自分たちの信仰の拠り所とした聖書、『天地始之事』の中で、禁断の実を口にしたアダムとイブがデウスに最終的に許されてしまったり、二人の間に出来た子供がその後、幸せに暮らすというような物語が作られたりしたのは、永久的な原罪を背負わせる神と背負われる人間という構図が、それまで神を絶体化したことのなかった日本人には到底受け入れられるものではなかったために他ならない。また、キリストが磔になったのも、人類の贖罪のためではなくバツレームに彼が生誕したおり、巻きぞえになって殺された子供達に対する本人自身の罪を贖うためとしか説明されていないのは、俗性を絶対的に超越した純粋な聖性というものを認めることの出来ない日本人の心理に基づいている。<sup>3)</sup> これとは対照的に、ユダヤ教やキリスト教に代表される超越的一神教では、神と人、天使と悪魔、正統と異端の間に決定的非連続があり、それが今までの人類の歴史を通じてどれほど多くの苦悩と争いの原因になったかは、計り知れないものがある。

また、日本の宗教的慣習として興味深いことは、お針子が針供養、芸者は簪供養、百姓は虫供養、漁師は魚霊供養などを営んできたことだ。現在でも、地鎮祭をやらずに建物を立てたり、交通安全の祈祷を受けずに新車を運転する日本人は余りいない。日本人は生活の道具や自分たちの食糧とする獲物にまで平等に魂があることを認めて、それに対して法事や祭りを通じて敬意を払ってきた。存在価値の上では、人間も動植物も無機物も同一線上で捉えられているからだ。自然界の対象物に神性を認める修験道や回峯行が日本で発達したのもそれなりの理由があったわけである。

## 善と悪

次に日本人の行動様式に見られる曖昧性について考えてみたい。よく言われるように日本社会では建前と本音の使い分けがなされ、腹芸という言葉に代表されるように交渉の場でも寡黙をよしとしてあくまで自己の本音の明言を避けようとする。このことが、日本人の思想と行動を外国人に理解しにくくさせ、日本人の国際交渉の拙さの一つの要因にもなっているのは否めない。し

かし、互いに自己の意見をむき出しにして終始対決し、相手を論理の刃でねじ伏せようとする西洋的交渉術にも反省が加えられなければならない。日米経済交渉などでも、とかくアメリカ側の強引な主張が目につくが、これはアメリカ人が自己と他者の関係に曖昧なものが存在するのを許せず、自他の基盤を非連続なものとして受けとめていることによる。だからこそ、彼らにとって法律や数値によって明文化された同意書が交渉相手との共通項として不可欠なわけである。

また、米国社会では訴訟地獄とでも言うべき現象が生じ、個人や企業同士が果てしもなく相手の非を突きながら自己の正当性を主張し、本来、目に見えない複雑に絡み合った問題を金銭という目に見えるモノによって決着づけようとしている。本来は正義を守るための論理が、今や白いものを黒い、黒いものを白いと裁判の席で雄弁に証明するための弁護士の道具として使われている。最近の数か月間は、O.J. シンプソン事件の裁判の成り行きに米国民の関心が集中しているが、国家の生産性に何ら貢献をもたらさないこのような裁判の過剰報道が疑問視されることもなく受け入れられているところに、米国社会の病根の深さがうかがい知れる。

さらに、人工中絶や武器所持の問題をめぐる、互いに自己の主義主張を理性を超えた一種のドグマとして信奉し、賛否両論が徹底対立して、墮胎された胎児を衆目に晒したり、産婦人科医を射殺したりするような事態まで発生している。残念ながら、これらの社会現象は曖昧さを許容できない論理性追及の文化が行き着く必然的な結果と言わざるを得ない。

反対に、日本人の倫理観においては、善と悪が連続しているがゆえに、善も悪を包含し、悪もまた善を包含するという見方が可能であるため、自己肯定と他者否定という決定的な対決が回避される道が用意されている。日本の神話や昔話でも、間違いを犯したものが厳しく罰せられたり、命を奪われたりすることは稀であるし、恐ろしい形相をした鬼が、ある事件を契機にあつという間に神や仏の使いに変身してしまったりする。そのようなことは物語だけでなく、歴史上の出来事としても、流罪になった政治的ライバルが知らぬ間に許されて都に戻っている例はいくらでもある。つまり、この国の文化では、永久に追放されなくてはならない悪という発想はなかったと言える。

もっとも、この曖昧な倫理観が裏目に出ると、「長いものに巻かれろ」式の規範を全く欠いた社会を作ってしまうことになり警戒を要する。親鸞の「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」という言葉は人口に膾炙しているが、これは人間の本性には善と悪が混在しており、問題はそれをはっきりと自覚しているかどうかであって、万人が等しく凡夫以外の何者でもないという彼の達観の中から出てきた表現のはずである。ところが、彼の宗教運動の中から仏の救済力に頼るあまりに自己責任を放棄して「本願ほこり」と言われる破戒行為を当然視するような人々が出てきたことが、相対的倫理観の危険性をよく示している。

## 生と死

さらに重要なことは、日本人の生死観では本質的に生と死が連続していることである。能楽の多くの物語があこの世とこの世が二重写しの世界を描いているのも、無神論者のレッテルを貼られたりする日本人が盆や彼岸の宗教的行事をことのほか大切にすることも、死者がこの世から遠いところにはいないと信じている具体的証拠である。武士が名誉を守るために切腹したり、神風特攻隊のような自殺行為を当然視するような戦略が可能になったりしたのも、日本人の情緒の中では、

生まれ変わりがごく自然なもととして信じられ、死が決して終末論的にも虚無的にも捉えられていなかったからである。従って、昨今よく話題になる脳死や安楽死問題にしても、異なった生死観を持つ西洋文明から出てきた定義づけが、そのまま日本人の納得の出来るものではありえないことに気づくべきだろう。生死を表裏一体のものとして受けとめてきた日本人から、欧米とは一味違った医療倫理が生まれてくることが期待される。

## 自と他

自己と他者の区別もかなり曖昧であり、そのため西洋人から見ればプライバシーの侵害と思われることが平気で行われているのも、日本人の自我が互いに繋がっているからと見ることが出来る。私は、常々、東京のラッシュアワー時の通勤電車を体験せずして、現代日本を語るべきではないと考えているのだが、日本人がお互いを全くの他人と思って入れば、あの体と体が密着する混雑を耐えられる筈がない。それに、日本人の集団主義はとかく槍玉に上がるが、いわゆる西洋の個人主義がこの国にそのまま適応されるわけにはいかない。芭蕉の「秋深し隣は何をする人ぞ」の句は、日本人が孤独になりきれない深い心情を表わしているとも言える。

ところが、日本人も曖昧性を放棄して、物事を明確に区別する一面がある。それは、人間関係や経済行為における「上」と「下」、「内」と「外」などを峻別する意識であり、そこから派生した敬語や礼儀作法の極め細かさは、他の文化に全く類例を見ないほどのものである。そして、外国人、在日韓国／朝鮮人、部落民、女性、老人、身体や精神に障害のある人々への差別には、根強いものがある。これらの差別問題に対して日本人は、正面から取り上げずに避けて通っているような傾向があるが、これはどうしても日本人全体がいつかは克服しなければならない大きな課題である。そのように日本人も自分達の社会に闖入した異分子に対しては決して曖昧ではないのだが、それはどちらかと言えば、自分達のアイデンティティーや集団の安定性を守るための防衛心理が働いているのであって、差別する側と差別される側に必ずしも人種的に決定的断絶が横たわっているとは思えない。従って、教育次第では差別問題は現状よりも遥かに改善される可能性がある。

それともう一つの深刻な問題は、現代日本人がかつてのように自然への畏敬の念を持ってなくなっていることだ。筆者は日本に帰ってくるたびに、海や山川に余りにも多くのゴミが捨てられているのを見て大変失望させられるのだが、これは単に公衆道徳の低下といったものではなく、もっと現代文化の深い所に根ざしているように思われる。つまり、現代人から自然の中に神聖なものを感じ取る、或いは、物理的環境と人間の間に連続性を感じとる能力がなくなった結果ではないかと危惧される。自然と遊離した日本人は、エコノミック・アニマル以外の何者でもない。

## 結論

外国で日本研究に携わる日本人として、益々この国の歴史が秘める文化の多様性には心惹かれるが、現代日本人とその社会の在り方には、懐疑の目を向けざるを得ない。今こそ日本人は、自然と人間、合理性と非合理性、正気と狂気、男性と女性、強者と弱者、などのように相い反する二つの属性が互いに敵対する関係にあるのではなく、本質的に連続している価値観を長い時間を懸けて培ってきた自国の文化の特質に思いをいたすべきだ。

最後にもう一度、曖昧ということについて、別な視点から説明してみよう。遠藤周作の『沈黙』の中で、迫害にあつて棄教したカトリック神父フェレイラが若い司祭に向かって次のような発言をする。

この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと恐ろしい沼地だった。どんな苗でもその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった。

ここでは「沼地」が生物を腐敗させる場所として大変否定的にとられている。そして、確かに「沼地」日本では漬物や納豆だけでなく、官僚主義とか学歴主義とか社会の中に臭いものが多数はびこっている。

ところが、本当は「沼地」には砂漠とは異なって、多くの動植物が繁殖するだけの有機的化学反应が起こりやすい条件が整っている。日本の生態系は、適当な湿度や温度のおかげで世界にも類を見ないほど豊かなものであるが、もし知的生態系というものがあるなら、それこそ世界中の思想文化がこの国で化学反应を起こせるだけの条件が備わっている。学問もこれからは、ますます学際的にならざるを得ないわけだが、例えば私の専門である宗教研究にも、文学や美術のみならず、歴史学、心理学、社会学、人類学などの知識が不可欠になってきた。しかも、このような学際的研究を可能にしてくれるような柔軟な発想を生み出す知的風土が日本には潜在的に備わっているわけである。残念なことにそれが実現していないのは、ひとえに戦前戦後を通じて画一的発想を奨励する教育システムに組み込まれてきた国民の最大の悲劇と言える。

その悲劇を克服して曖昧さの持つ創造性を積極的に自覚するなら、まだまだ日本には国際貢献の大きな余地が残されている。特に、地球環境問題や南北問題に行き詰まりが出てきた現代において、すべての存在に不可分の繋がりを認めることのできる日本人の曖昧性には、地球人類の新しい価値観を示唆する貴重な要素が含まれていることを強調しつつ、それを私の故郷京都で開かれた今回の会議での発表の結論としたい。

#### 〔注釈〕

- 1) このことについては、京都会議にも招かれていた大江健三郎氏がノーベル賞受賞式(1994年12月)で『あいまいな日本の私』という講演の中で言及している。
- 2) 常世についてはさまざまな論議があるが、筆者は古代日本人の常世の概念は全ての死後、魂がすみやかに帰趨していく海上や天空の楽土と理解している。谷川健一『常世論』(1985年、平凡社)参照。
- 3) 『キリシタン書/排耶書』「日本思想大系」v. 25 (1970年、岩波書店)所収。